



海外インターンシップ

ドイツの体験

10大学の50人

確かな感触

10大学で組織した「ドイツNRW（ノルトライン・ヴェストファーレン）州インターンシップ実行委員会」は、国際社会で活躍する人材の育成を目的として、8月21日から9月15日まで約3週間、インターンシップを実施した。

参加大学は秀明・淑徳・創価・多摩・中央・東海・獨協・日本女子・フェリス学院・早稲田の計10大学である。インターンシップの位置付けは、授業科目、就業体験など大学によって異なる。応募条件は、「ドイツに関心があり、TOEIC550点以上、もしくはドイツ語のコミュニケーション力があること」で、対象は2・3年生、定員は50名だった。

本学からは最多の7人（男子1、女子6）が参加した。受入れ先はデュッセルドルフ日本商工会議所が窓口となって手配する日系企業をはじめ、ドイツ企業、市役所、学校、マスコミ、文化施設など、多業界にわたった。

実施にあたっては、現地の日本商工会議所の職員の方々に大変お世話になり、殊に「ドイツの良さを知り、いつかこの地で活躍する日本人が一人でも多く増えて欲しい」との藤本修事務局長の日本人学生への期待と熱意には並々ならぬものを感じた。プログラムの後半で、私は事務局として現地を訪れ、商工会議所ほか、お世話になった方々へのご挨拶や受入れ企業訪問、閉講式などを行った。閉講式には本学から大久保信行理工学部長（インターンシップ担当）と高橋慎也教授（文学部独文専攻）にご参加いただいたほか、一緒に中大生の受入り先を訪問し、プログラムの内容や、インターンシップに対する企業側の考えを伺った。全体として、今回のインターンシップは企業、学生ともに好評で、企業の9割以上が来年も受け入れの意思があると回答している。

しかし、それには課題もあり、学生には英語力以外にさらにドイツ語力の強化が望まれている。3週間という短期間で実務をするには、スタッフとのコミュニ



パテで足りない部分を埋める私



虫メガネで壺の色を補修するレーバインさん



博物館の入口で、私を担当したスボルクホルストさんと



古色そう然とした美術館正面

「中大生の派遣リスト」野中麻里子（法）メノルト・ウント・オーリンガー▽小林文佳（文）ドイツ第二TV▽菱沼智子（総合政策）KDDI▽川口 泉（商）独日センター▽前田さや子（文）ヘッチェンス・ドイツ陶器博物館▽河田太郎（商）ドイツ三越▽加藤和恵（法）三井物産

前田さん^(文)の博物館体験 「文化」に対する理解を学ぶ

Uバーンのハインリヒ・ハイネ・アレーの駅を抜けてアルトシユタットに出る。職場へと急ぐ通勤客があふれ、パン屋ではビジネスマンが朝食のサンドイッチを買い求めている。

朝のウインドーショッピングを楽しむながらフリーガー通りを進むと、ライン川に突き当たる。私のインターンシップ先の「ヘッチェンス・ドイツ陶器博物館」は、そのすぐそ

ばにある。プザーを押し、インタホン越しに「Guten Morgen!」で1日が始まる。昨年、短期留学という形でドイツに滞在してから「ドイツの人たちと働いてみたい」という思いが、自分のなかに常にあつた。なぜなら、短期留学ではホームステイでもしない限り、先生以外のドイツ人と深く関わる機会もなく、ナマの日常会話に触れることもない。そこでドイツ人

ニケーションや、書類を読んで理解するためのドイツ語力が不可欠ということである。課題は他にもあるが、学生達の真剣に取り組む姿勢は企業に大変好感を持って迎えられた。プログラムの充実をはかり、来年もぜひ継続したい。

（ドイツNRW州インターンシップ実行委員会事務局）
中央大学就職部 増田 貴美子

と一緒に仕事をして、彼らの仕事のみならず、価値観や日常生活に触れてみたいと考えていた。

皆さんの中には「文化施設でインターンシップ」で聞いて、「？」と思う人がいると思いますが、ドイツでは文化施設でインターンシップというの一般的なものである。これは文化というものに対するドイツ人の深い興味と理解旅奥の大きさを示している証拠だろう。

私の研修先は、8千年もの間の世界じゅうの陶器を集めた博物館である。「マイセン」や「ヘキスト」などドイツの有名な陶器をはじめ、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、アジアの原始・古代から現代までの、ありとあらゆる陶器を所有している。有田焼、伊万里焼のほか、京セラの最新セラミック技術の展示など日本のものである。

私が研修先に博物館を選んだ理由は2つあった。1つ目は、私がいま学んでいることが、そのまま生かせるのではないかと思ったからである。ちょうど出発前の2週間、日本の博物館で実習させていただいたので、両国の博物館を比較することが出来

ると考えた。

2つ目は、ドイツ人の精神的に豊かな生活を形作る文化施設のあり方を見てみたかった。ドイツには美術館や劇場、コンサートホール、オペラハウスなどが小さな街にも必ずある。それらが人々の生活にどのように関わっているのかを知りたいと思ったからだ。

私に与えられた当面の仕事は、館所蔵の日本語文献をドイツ語に翻訳することだった。付属の図書館には日本の博物館や陶芸家から寄贈され

「無題」といい壺、「題なし」でメモる

毎月第1月曜日は、陶器の「お宝鑑定日」である。一般市民が持ち込んだマイセンをハーケンヨス館長が自ら鑑定し、その真偽や時代を見定めるのである。マイセンを前にした持ち主の表情が面白い。がっかりして帰る人や、うっとり自分のお宝を見つめている人……。日本のテレビ番組を見ているかのように。大きなカタログとフライヤーづくりの仕事にも関わった。ある「無題」と題した壺を業者が、「題なし」と

た文献が、かなり多く収められているのだが、スタッフのなかで日本語のわかる方は1人もいないので、困っていたという。

まるで「記号のような」日本語をドイツ語に訳していく私の作業は、彼らの目には不思議に映ったらしい。「この部分が、この意味なの？」と、日本語とドイツ語を交互に指さして何度も聞かれた。しかし、私が知らない日本人陶芸家の名前を知っていたりして、私がびっくりさせられることもあった。

思っ、カタログの写真説明を空欄にしてしまったことについて、メモっていた時は「文化の違い」をつくづく感じた。

また、バラバラになった壺を接合して、足りないパーツをパテで埋め合わせる作業をやらせてもらった。実際に触れるだけで大感激なのに、自分の手で壺が再び息を吹き替えしたときは、言葉にならないほど嬉しかった。

博物館運営という観点から見ると、

博物館は日替わりで、さまざまなイベントを開催しており、私を担当したスボルクホルストさんの側で、いろいろなお仕事を見せていただいた。毎週木曜日に開かれる子供向け陶芸教室で、子供たちが意外に日本人慣れしていたので、なぜだろうと思っていたら、日系企業が集まるデュッセルドルフは、日本人の友だちがたくさんいるとのことだった。金曜日には日本人向けの陶芸教室もあり、現地駐在員の奥様たちの憩いの場になっている。

水曜日には社会人向けに夜9時まで開館していた点も、日本にはないシステムだった。

※

わずか3週間という期間は短すぎで、インターンシップと呼べるものではないかもしれない。しかし、この期間に、人から、ものから得たものは測り知れなかった。これから就職を控え、何かドイツに関わる仕事をしたいということだけは、はっきりしてきた。

事務所内の私専用のデスク



デュッセルドルフ地裁の内部



メノルト・ウント・オーリンガー外観



ライン川のほとりに立つ私

野中さん(法²)の法律事務所 学生も同じ役割課せられる

クレフェルトから市電に乗り、5分ほどかけて中央駅に向かう。朝の陽光に包まれているので、日々少しずつ鋭さを増す風に、温もりを奪われることはなかった。ここで乗り換えてデュッセルドルフに向かうのだが、通勤ラッシュなど関係ないらしく、皆いたつてのんびりしている。

ライン川を越えるとデュッセルドルフだ。大きなビルが視界に入るようになり、車や人の往来も活気が出てくる。私はそこから地下鉄に変わり、「ハインリヒ・ハイネ・アレー」で、もう一度乗り換える。向かうは「アム・ヴァアハーン」。その駅のすぐ向かいに、私のインターンシップ先である「メノルト・ウント・オーリンガー」はある。

「メノルト」は世界でも有数の法律事務所で、本拠地をアメリカに構え、世界各国に事務所を持つ。私企業関連の法律、著作権法などを中心に取扱い、大手顧客の中には、三菱、NTT、富士フィルム、日航ホテルなどの日系企業も多く含まれている。

私は法律学科で勉強しているため、法律事務所でのインターンシップを希望した。理論や学説を学ぶ日々のなかで、実際にそれらの法律がどう運営されているか、について興味が

あつたし、なによりもドイツで法連用の「現場」を経験したかった。

ことしの2月、ドイツで開かれた日独学生交流（日独青少年交流協会主催）に参加して、私は多角的にドイツの側面を見つめる機会を得た。旧東ドイツ地域の子供のための福祉センター「SOSキンダードルフ」

を訪れ、子供たちとの交流や勉強会を見学を通じ、東西格差の問題を福祉の現場から見つめた。また、フンボルト大学やポツダム大学、各種専門大学の学生とのディスカッションでは、極右グループの台頭や歴史教育について議論が繰り広げられ、互いの理解を深め、これから私たちが若い世代がなすべきことについて確認することができた。こうした2月の経験が私に夏のインターンシップへの参加をインスパイアさせた。

実際には「働く」というよりも、「学ぶ」ことに重点が置かれた研修であった。普通、ドイツのインターンシップは社会へ出る一歩手前の準備段階としてとらえられており、そこでは学生は社会人と区別なく役割を与えられ、もしくはそれを探し出し、受け入れ側の期待を十分満たす結果

を収められなければならない。

つまり、インターンシップの大前提として、その企業なり事務所なりで、将来働くんだという決断が本人に求められるし、本人もその気がなければ、そもそもインターンシップなどしないのだ。

「裁判例に関する情報は口外しない」

ドイツでは基本的には残業はない。会議がだらだら続くこともなく、必要事項はすべてメールで確認しあう。秘書の役割は大きく、1人の弁護士に1人の秘書が配属され、彼女は担当弁護士のタイムテーブル週・月単位

のスケジュールを完璧に把握している。いま、この記事を読まれている方は、裁判の具体的な中身について知りたいと思っていらっしゃるだろうが、それは残念ながらできない。インターンシップを行うについての取り決めにより、裁判例についての情報はいっさい口外しないということになっているからだ。

ただ、私が実際に足を運び裁判を傍聴したところは、労働裁判所と地方裁判所だった。地裁へはカルテ

今回はほとんどの受け入れ先企業にとつて、日本人学生を受け入れる初めての機会だったということで、

私の受け入れ先でも、何か決まった課題を与えられるわけでもなく、自分のやりたいことを伝え、できる範囲内で希望をかなえてもらうという形

ル・ヒアリングで行ったのだが、これは稀なケースだ。その事務所は専門が労働法、私企業関連の法律というところで、民事のケースを請け負うことはほとんどないのである。

来年、法律事務所でのインターンシップを行う人は、その事務所の専門分野の法律を徹底的に勉強して参加されることをお勧めしたい。また、ドイツ語を「読む」能力は必須である。とにかくケースファイルの中の書類の90%以上はドイツ語で書かれているし、ケースの基本情報を把握することさえ、読む力がなければ不可能である。

事務所ではほぼ全員が英語を完璧に使いこなし、日頃のコミュニケーションは英語で十分である。しかし、

を取った。

具体的な内容は、①裁判所への同行、②クライアントとの会議に出席、③弁護士の空き時間にレクチャーを受ける、というもので、その他は事務所内に与えられた自分の部屋が、近くの図書館で勉強をしていた。

これも事務所によって差異がある。なるべく、夏休み以前に情報収集は済ませておいた方が無難だ。夏に入ると、ドイツ人とは連絡が取りにくくなるので、要注意である。

ところで、ここで耳寄りな情報がある。法学部の学生であれば「やる気応援奨学金」のバックアップを受けて、NRW州インターンシップに参加することができる制度を「存じ」だろうか。私はその第1号なのだが、「やる気」さえあれば、大学が学生を援助してくれる。

今年の夏の経験は、私に将来の方向性を決めるうえで、多くの示唆を与えてくれた。当面は学問にこの経験を上乘せして、自分のビジョンを明確にしていこうと思う。